中学生の豊かな言語産出能力を育成する実践的研究

山　本　玲　子
（京都教育大学附属京都中学校）

An Empirical Study on Writing Instruction for Junior High School Students

Reiko YAMAMOTO

Kyoto Junior High School attached to Kyoto University of Education

2008 年 11 月 28 受理

抄録：本研究は，「中学生に対するライティング指導」に関する実践的研究に続く追加研究である。前段階では，生徒の情動面に訴える内容重視のインプットに焦点化した結果，中学生が長い英文を書くことを躊躇せず自己表現するに至った。次の段階となる本研究では，逆に短い言葉に内容が凝縮される「英詩」を取り上げ，詩という高度な形式で行う自己表現を目指すこととした。中学生に，音韻上工夫された英詩の仕組みを理解させ，そこから広がる豊かな意味世界を認識させることは非常に高いハードルであり，実際に英詩を中核とした実践研究はほとんどない。本研究は，教科書の枠を越えてオーセンティックで良質のインプットを与えてきた一連の実践の総括となるものであり，難易度の高い言語材料であっても生徒の内面に蓄積されうること，その蓄積が最終的に豊かな言語産出に至ることの実証と考察を試みたものである。

キーワード：（ライティング能力，自己表現，英詩）

Ⅰ．はじめに

中学生の英語能力における四技能のうち，特に近年低下傾向にある「書く力」を研究課題とし，中学３年生を対象に１年間にわたる実践研究を行ってきた。英語で書くことの必然性を生み出す授業の工夫と，「他者へ向けて発信したい内容」を生徒が持つことで，中学生のライティング能力が向上することが確かめられた。内容重視のインプットが思春期にある中学生の内面に訴え，言語形式だけでなく内容と共に生徒の心の深部に残り，そしてそれが内容のある言語産出につながることが確認された。本研究は，以上の実践的研究の追加研究として，中学校英語教育の最終段階にあたり，１年間にわたるオーセンティックで良質のインプット[注1)]の蓄積が，さらなる高度なアウトプットを促進することを目指した取り組みを行うこととした。具体的には，中学生が英詩の形式にのっとり自己表現をすることが可能であることを実証するものである。

現状として，中学・高校の現場では英詩をはじめとする英文学は軽視されている。福田(2003)はその理由として，指導者自身が英詩の指導法を知らず敬遠傾向があると指摘した上で，英詩は発音教材としても授業にうるおいを与える意味でも最高の教材であるとして，中学・高校でも積極的に取り上げることを推奨している。中学校の教科書の文章は無味乾燥あるいは単純な対話文が多く，詩はせいぜい一作品しか掲載されていない。たとえ名作と言われる小説が掲載されていても，紙面の都合や語彙レベルの問題からダイジェスト版になっているため，原作の良さは失われる。

「生徒は時には本物に触れてみたいのではないか。生徒のそのような心の声に耳を傾ければ，『使いやすい本

物』を提供することは，授業の効率を上げるために必要な工夫ということになる。詩は言葉の神髄である。本物である。」と福田（2003）は論じている。国語の授業が詩，小説，古文，漢文，俳句，短歌などの「本物」に満ちていることを思えば，現状の英語の授業は，同じ言語の授業でありながら，言葉の魅力に気付かせる配慮に欠けると言える。国語で古文や俳句を鑑賞するためには，音韻上のルールや季語をはじめとする専門的かつ分析的知識が必要であり，指導者による解説を通し理解することでようやくそれら「本物」を味わう段階へ至る。英語の授業でその「本物」を導入する際の困難さは，英詩，ライム，韻文などを解説し理解させる指導力を持った教師の育成や，その指導法の研究が重視されてこなかったことにも起因する。斉藤兆治（2003）は「英語をもっぱらコミュニケーション能力としてとらえたがる最近の英語教育理論のため，今では英語教師と英語文学教師が別の人種になってしまったかのようにすら見える。だが文学というものがもっとも洗練された言語表現である以上，文学作品を用いない英語教育はありえない。とすれば，言語と文学の本来の関係の修復，英学的なバランス感覚の回復が求められているのである。」と主張している。

内面に訴えるインプットに焦点化した前研究において筆者は，中学3年生という思春期の生徒が，良質の題材に対する豊かな感性を持っており，その感性に訴えることは，この年代特有の情意フィルター（Krashen, 1985）を下げることにもつながる可能性があると考察した。言いかえれば，その世代だからこそ，難解と思われている英詩を取り上げる意義があるとも言える。「言葉の真髄」に触れることで，彼らの言葉に対する感性はさらに豊かになり，豊かな言語産出にもつながると考えられる。本研究では，英詩の仕組みとその魅力を伝えることで，中学生が英詩という型において自己表現できる可能性を追求する。

Ⅱ．先行研究

英詩に含まれる基本的な形態に，マザーグースに代表されるライムがある。英語圏の子どもがそれを通して英語の音遊びに慣れ親しむライムは，歌のようにメロディーを伴うものもあれば，詩のように語呂のよいフレーズの繰り返しから構成されているものもある。音韻上の魅力だけでなく，内容的にも時にはナンセンスでありながら子どもの心をつかむ魅力に溢れている点は，日本の童謡・言葉遊びに共通する。例えば，This is the house that Jack built や Five little monkeys は日本の生徒にとっても魅力的な音とリズムから構成され，小・中学校における英語の授業でも「チャンツ」として活用されている。耳から入る音だけでなく実際声に出し身体感覚で英語の音に浸ることは，新しい言葉を自分の中に入れるための重要なプロセスである(山本，2008b)。チャンツの扱いについて齋藤栄二（2008）は，「小学校英語において，チャンツは重要な役割を果たしているが，中学の後半になればチャンツ指導は避けるべきである。実際の会話をチャンツのリズムで行えば不自然極まりない。中学の前半で，チャンツから非チャンツへと緩やかに移行させることが大切である。」と述べている。それは，リズムに関わる指導を一切排除するという意味ではない。英語はイントネーションをはじめとして，日本語より遥かに音韻上の変化に富む言語であり，それが生徒の苦手意識を生み出す原因となっているが，逆に英語を楽しみ，英語への興味を喚起する要因にもなり得る。日常使用する会話表現をチャンツに載せるから不自然なのであり，押韻や音素数の組み合わせに工夫をした結果リズムが生まれる英詩は，チャンツに代わる魅力的なリズムの世界へ生徒をいざなう。中学の後半で英詩を導入することは，その意味でも意義がある。入門期におけるチャンツ指導同様，声に出し身体感覚と共に言葉の世界に浸らせる指導が効果を発揮すると予想できる。

福田(2003)は，中学生に英詩指導を行う際の手順として，Rossetti (1893)の What is Pink? (Appendix) を例に取り，以下のような指導法を提案している。

① 授業の導入として数分を英詩に当てる。最初は 2 行とし，次回からは 2 行ずつ増やしていく。このペースだと，全員に無理なく覚えさせることができる。
② 教師は正確に発音し語りかけるように朗唱する練習をした上で，文字を見せずに大きな声でリピートさせる。2 行あたり 3 文しかないので，1 文ずつ意味を教えながら 5 回から 10 回リピートさせる。
③ 次の時間は新しい 2 行を同様にリピート練習し，最初から通して 5 回リピートさせる。8 回で終了する。上のクラスでは，1 回に 4 行ずつでもよい。大切なのは与えすぎないことである。生徒が次の時間を楽しみに待つようにしたい。
④ この詩は会話の言葉で書かれているので，ペアを作り，対話形式で練習させる。単語を一部入れ替えて自由に表現させ，対話練習をさせる。

また詩の韻律,脚韻,頭韻については最初から説明せず,生徒に考える喜びを残すことも重要だと指摘している。このように「教えすぎない」「ゆっくりと楽しむ」ことを教師が意識することで，中学生にも英詩の特徴を理解させ鑑賞させることが可能になる。

中学3年生という年齢は,思春期に伴う情意フィルターが増加する結果,言語産出に消極的になる傾向がある。従って，統語上の正確さに拘泥するより自己意識的な情動を産出させることが重要になる。自己意識的情動の産出には自己認知と情動生起が必要となる。指導者はそれを意識したインプットを心がける必要がある。箕浦(1984)は,「文化特有の意味空間の摂取過程は年齢に規定される面があり，個人の成熟によって規定されたシークエンス内で起こっている。」と論じ,さらにそこに存在する感受期は 15 歳であると指摘している。Harmer (1983)は，思春期は英語学習に最も困難な時期であるが，適切なレベルの刺激を受けることで素晴らしい知的レベルに高められる時期でもあり，適切なチャレンジレベルに置かれると力を発揮する年代であると主張している。英詩の学習はまさにその知的挑戦レベルに位置づけられる題材であろう。以上の先行研究から引き出される考察より，本研究では，15 歳という感受期にいる生徒に音韻面と内容面双方から英詩の魅力を伝え，言語産出において彼らが潜在能力を発揮できるような場を設定することにする。

Ⅲ．指導の実際

1. 研究目的

本研究は次の二つの項目を検証することを目的とする。

(1)英詩を中学生に向けた適切な方法で解説し指導することで，中学生は英詩の基本的な構造を理解し，かつその意味世界の広がりを自分の感性で感じとることができる。

(2)を実現した中学生が，英詩というスタイルを使って自己表現することができる。

2. 被験者

研究対象となったのは中学 3 年生 123 名（男子 61 名，女子 62 名）である。すべての対象者は，新学期当初よりライティング能力向上に焦点化した学習を 3 か月継続した結果，書く事への抵抗感が徐々に払拭され，間違いを恐れず表現活動を行う態度に向上が見られた(山本,2008a)。2 年終了時 GTEC コアの結果は 600 点中 380 点で，ライティング項目も含め過去の中学 3 年生と比較して標準レベルであった。

3. 題材

使用した英詩は以下のとおりである。

① 文部科学省検定教科書『New Crown Ⅲ』(三省堂) の Let’s read より Courage (Waber, 2002)
② クリスティーナ・ロセッティの What is Pink? (Appendix)
③ クリスティーナ・ロセッティの What are Heavy? (Appendix)
④ ジョージ・ゴードン・バイロンの She Walks in Beauty『彼女は美をまとって歩いていく』

②③については福田 (2003) の解説を使用，④については斉藤孝 (2004) の解説を使用することとした。

４．指導の展開

1) 本物の題材に触れる段階

第１段階は中学３年生後期 (10 月) から実施した。前期に引き続き教科書を越えた題材を導入し，英語の美しさや魅力を堪能する機会を日常的に持つことで，生徒の中に，教科書や既習語彙を超えた良質なインプットを受け入れる土壌を育てることを意図した。具体的には，音韻的にも内容的にも優れた文章 (ヘレン・ケラーの The Story of My Life，キング牧師の I Have a Dream) をその背景と共に導入し，教師によるオーラル・インタープリテーション (情感を込めた口頭表現) を通して言葉の持つ力を感じ取らせる。さらに言葉のリズムや力強さを体感させ言葉を身体感覚の中に沈める (近江，1999) 目的で，生徒自身にも音読指導を行う。本段階では，たとえ難解な語彙があっても書き手の思いを感じ取ることが可能であること，過去に書かれた名作が音声にすることで息を吹き込まれることを実感させたいと考える。

2) 英詩に触れ，簡単なルールを習得する段階

英詩の導入は高校入試も終了した２月，３月に実施した。英詩に親しむ目的で導入する最初の題材は Courage であり，押韻や定型はなく詩というよりも散文である。未習語彙のみ説明を行い，後は繰り返し音読して味わうにとどめ，その後生徒自身が翻訳に取り組む。次に，What is Pink? および What are Heavy? を導入する。教師の音読を聞きながら「美しい響きを作り出している要因は何だと思うか」と問いかけ，脚韻・頭韻を生徒自身に発見させる。What is Pink？では２行ずつ，What are Heavy?では４行ずつがワンセットとなり脚韻を踏んでいることも説明する。また意味上においても，色の順や近い視線から遠い視線への変化など，工夫点を発見させ話し合いを持ちながら鑑賞する。

3) 英詩に興味を持ち，さらに複雑なルールに触れる段階

生徒の気付きや意欲の度合いを見ながら，以下のような解説を追加する。英詩は韻律がキーになっている。「行の長さ」の違いは，日本語の五七五のような「文字の数」ではなく，１文字１音ではない英語においては「音素の違い」と表現する。What is Pink? の詩においては，２行がひとまとまりで，前半は７音と５音，後半の色は８音と６音 (最後の行は４音) となっている。アクセントは弱強が基本であるが，この詩では各色の２行目が弱弱強，強弱などいろいろで，これが巧みな韻律を作り出すことにも触れ，ペンでタッピングし音を出すことで教師が (強弱の) リズムを取りながら詩を朗読してみせる。ペンやメトロノームを使ったリズム練習は小・中学校の現場ではチャンツ指導などでごく一般的な方法であり，生徒も親しんでいる。

4) 難解な英詩に触れ，音韻上あるいは意味上の魅力に気付く段階

バイロンの She Walks in Beauty の書かれた時代背景，バイロン自身の人生について解説し，詩の世界に浸れる素地作りをする。3)までの段階で詩の魅力に気付けた生徒は，この詩が持つ難解な語彙や複雑な音の構成に臆せず，積極的に理解しようとするはずである。内容全てを理解しきろうとせず，自分の感覚や感性だけで味わおうとする態度を育てる 1)の段階は，この 4)の段階で大きく意味を持つ。

5) 自分自身が英詩の形式で表現活動をする段階

What are Heavy? と同じ形式で形容詞と名詞のみを組み合わせた４行詩を創作し，自己表現する。

Ⅳ．結果と考察

最初の詩 Courage（Ⅲ．4．2)）の翻訳作業においては，「直訳ではなく日本語の詩を創作するつもりで」と指示したこともあり，生徒は積極的な態度を見せていた。国語で詩の音読に馴染んでいるためか音読にも意欲的で，気持ちを込めて朗読できていた。このことから，日本語でも英語でも「詩」という形態や「創作」「表現」という側面に中学生は興味を喚起されることが推測できる。

What is Pink？および What are Heavy? を題材に，基本的な英詩の構造及びルールを学習した直後，生徒たちは以下のような感想文を綴った。予想以上に英詩の規則の学習に抵抗がなく，むしろ未知の世界に興味を持っていることが伺える。また，英詩のルールに対しては「難しい」という印象を持ちながらも，「理解できたら面白そう」「奥深い世界を感じる」と前向きに捉えている傾向が見られる。(　) 内は筆者の付記したものである。

- (What is Pink？に対し）よく読んでみると虹の七色になっていることに驚いた。音も合わせてあり，詩を読み返すほど深さを感じる。
- 最後の音を同じに終わらせたり，リズムよくさせたり…。すごく入りやすい英文！こんな詩を作れるなんてすごいと思った。この前，教科書の Courage を自分で翻訳したけど，そういうのは好きだし，これからもやってほしいと思った。自分で英語で詩を作れるようになったら本当に英語力が上がったって思っていいと思う。
- 英詩はたくさん勉強しないと理解できなさそうだから難しい。(What is Pink？に対し）英詩は日本語に訳したら分かるというものじゃないのだ。例えば（訳中にある）最後の「だいだい」は何を言いたいのか分からないが，英語を見てやっとオレンジと橙色がかけてあるのが分かる。
- 形式といういろいろな制限があってこそ，このような詩ができるのだなと思った。自由に書くだけではできないような，様式美の世界が広がっているように感じた。
- シェイクスピアとかに興味があるので，英詩が学べてうれしかった。いろんな工夫をして美しさを伝えるところがすばらしいと思う。
- 韻を踏んでいるところは漢詩と同じだと思った。最後の 2 行まではリズムがほぼ同じだったので，英詩を作るのは難しそうだと思った。
- 英詩というものはとても奥が深いのだなあと感じました。英詩最高。
- 日本語の現代詩では韻を踏んでいるのはあまりないけれど，英詩は韻を踏むことろが多くて，読んでいて気持ちよかった。この前シェイクスピアの戯曲を読んだけど，韻を原文では踏んでいるところの解説がものすごくてびっくりした。やっぱりそれは日本語が表意文字なのに比べて英語は表音文字だからなのかなと思った。
- 先生は『この詩は完璧なリズム』と言っていたけど，Where the clouds float through のところのリズムは全然違うと思うんですが。yellow と green のところも上と同じリズムで pink とかとは違うと思う。

指導者としては，さらに複雑なルールの説明（Ⅲ．4．3)）は当初予定していなかった。中学生の理解を越えていることを懸念し躊躇したためである。しかし上記の感想文の中で，生徒は教師の予想をはるかに越える高い理解力，知識欲を見せてくれた。中でも最後の感想文は象徴的であり，この感想文を書いた生徒が，英詩におけ

る音韻上の特徴を完全に理解していることが伺える。

Ⅲ．4．2）段階で生徒の理解度が高かったことと「もっと英詩について勉強したい」という声が多かったことより，引用した最後の感想文が指摘する「リズムの崩れ」の原因である韻律についての説明（Ⅲ．4．3)）を次の授業で追加することとした。韻律の仕組みと韻律の変化が言葉の世界を豊かにしている仕組みを説明した上で，「『完璧なリズム』とは同じリズムという意味ではなく，完璧に計算しつくされた，少しずつ変化するリズムの組み合わせであるという意味です。これは中学生には難解すぎると判断し説明しなかったのですが，それに気付き指摘をした人がいたことが，まず素晴らしいことです。」とコメントした。教師が一方的に大学レベルの内容を指導した訳ではなく，生徒の理解度や興味の高さがレベルを自然と押し上げたという展開であった。韻律についての講義は，全ての生徒が理解に至った訳ではないが，全員が高い知識欲を持って取り組むことができた。学年末試験も高校入試も終了した時期の授業であり，評価や成績に縛られることなくただ「新しい世界を知るために学ぶ」環境があったことも功を奏したと思われる。

以上の結果より，研究目的の最初の項目である，「英詩を中学生に向けた適切な方法で解説し指導することで，中学生は英詩の基本的な構造を理解し，かつその意味世界の広がりを自分の感性で感じ取ることができる」レベルに到達したと結論づけられる。

「英詩というスタイルを使って自己表現にまで至る」という 2 番目の目的はⅢ．4．5）において検証された。結果は，最後まで作品を完成させられない生徒もおり，やはり中学生にとって相当高い目標であったことが伺えた。それまでのライティング能力向上の実践的研究の成果から自己表現に対する主体性を獲得した生徒だったが，それまでの「できるだけ多くの英文で自己表現する」タスクから「英詩という形式にはめて最少の語彙で表現する」本研究のタスクへの変化は中学生にとって大きすぎたと考えられる。ただ，中にはレベルの高い作品が生まれ，英詩というスタイルを使って自己表現するに至った生徒もいたことは特筆に価する。その中から，以下に 6 人の作品を抽出・掲載する（英語は原文のまま。日本語は筆者訳)。

What are beautiful?	Women and blue sky.	きれいなものなあに。女性と青い空。
What are dirty?	Adult and garbage.	きたないものなあに。大人とごみ。
What are near?	You and me.	近いものなあに。あなたと私。
What are distant?	You and me.	遠いものなあに。あなたと私。
What are sweet?	Ice cream and candy.	甘いものなあに。アイスクリームとキャンディ。
What are sour?	Lemon and umeboshi.	すっぱいものなあに。レモンと梅干。
What are bitter?	Cacao and medicine.	にがいものなあに。カカオと薬。
What are happy?	What I eat!	幸せなものなあに。私が食べるもの全部！
What are high?	Mountains and flying birds.	高いものなあに。山と空飛ぶ鳥。
What are low?	Children and my grade.	低いものなあに。子どもたちと私の成績。
What are dark?	Midnight and story.	暗いものなあに。真夜中と物語。
What are bright?	The sun and your smile.	明るいものなあに。太陽とあなたの笑顔。

What are high?	Mountain and hope.	高いものなあに。山と希望。
What are cute?	Strawberry and children.	かわいいものなあに。苺と子ども。
What are warm?	Blanket and “Thank you.”	暖かいものなあに。毛布と「ありがとう」。
What are shining?	The sun and your dream.	輝くものなあに。太陽とあなたの夢。
What are cool?	Water and nervousness.	ひんやりするものなあに。水と緊張。
What are warm?	Soup and kindness.	あたたかいものなあに。スープと親切。
What are cold?	Ice and criticism.	冷たいものなあに。氷と批判。
What are hot?	Fire and passion.	熱いものなあに。火と情熱。
What are beautiful?	The sunset and snowflake.	うつくしいものなあに。日没と雪のかけら。
What are mean?	Betraying and hypocricy.	卑しいものなあに。裏切りと偽善。
What are deep?	The sea and lake.	深いものなあに。海と湖。
What are true?	Sincerity and honesty.	真実はなあに。誠実さと正直。

5 番目の作品は，具体名詞と抽象名詞の組み合わせという工夫がされている。また最後の 6 番目の作品は，脚韻まで配慮されている。どの作品も，中学生らしい瑞々しい感性が豊かに感じられる作品である。教室で教師がこれらの作品を朗唱すると，生徒たちが頷いたり感動の嘆息を漏らしたりしながら鑑賞する姿が見られた。英詩という形式にはめて簡潔に織られたからこそ輝く言葉のひとつひとつを，生徒たちは自分の感覚で確実に感じ取ってくれたと確信できた。

Ⅴ．おわりに

かつて英語教師の多くは大学の英文科出身であり，それは，英詩をはじめとする英文学を修める場であった。筆者は学部入学当初，期待していた実践的英会話の代わりに埃をかぶったような言葉ばかりを学ぶ場所だと感じ失望したことさえある。だが徐々にその奥深さを知り，英語の本当の魅力や美しさを知ることができた。現在は英語教師の出身学科も，コミュニケーション学科や国際〇〇科といった多種多様な学科を含む英文科以外の学科が急増し，英文科であっても英文学より実践的な講座が多く開講される大学もあると聞く。授業で英詩を取り上げようという教師はますます減っていくかも知れない。だが，福田(2003)は指導法に加え，詩の韻律（音素数が一定であること）やアクセント（弱強を基本にアレンジされ巧みな韻律のもととなるもの），脚韻，頭韻についても基本的な事項をわかりやすく解説している。筆者も英詩が専門ではないが，このような教材があれば，準備さえすれば英詩指導は誰にでも実践可能である。僭越を承知で言えば，経験の浅い教師にも恐れず挑戦してもらいたいと考える。学力低下，国語力低下が叫ばれていても，瑞々しい感性の小説家や歌人は若者たちの間から次々と生まれている。「本物」に触れ言葉の魅力にその感性及び身体感覚をゆだねる体験を積み重ねることで，生徒は潜在能力を発揮する。言葉の教育とは本来，英語日本語という差異を越えて存在する「言葉の真髄」に，生徒と共にどこまで近づけるかを追求することではないだろうか。中学校の英語教育は，コミュニケーション能力育成をめざす英会話教室の機能も，受験を突破するための塾の機能も要求されるのは事実である。しかし，その先

にある「真髄」にこそ，学校英語の矜持があることを再確認した上で，それを追求するための実践を続けていく必要があるだろう。

注 1)　本論文では「オーセンティックなインプット」を，教材用に作成されたもの及び，日本人が書いたものを除く英語の題材と定義した。英語の統語上，形式上，音韻上の美しさと同時に，内容が豊かなものを「良質」と表現した。この 1 年間で題材としたものは，本の抜粋（ヘレン・ケラーの The Story of My Life），歌（Beatles, Carpenters），スピーチ（キング牧師，リンカーン，ネルソン・マンデラ），ライム（マザーグース），映画（The Miracle Worker）である。

参考文献

福田昇八．2003．英詩への招待．『英語教育』第 52 巻，4 月号，大修館書店．38-39.

Harmer, J. 1983.　*The practice of English language teaching*.　London: Longman Group Ltd.

小室俊明（編）．2001．『英語ライティング論』．桐原書店．

Krashen, S., D. 1985.　*The input hypothesis: Issues and implications*.　London: Longman.

箕浦康子．1984．『子供の異文化体験－人格形成過程の心理人類学的研究』．新思索社．

沖原勝昭（共）．1985．『英語のライティング』．大修館書店．1-39.

近江誠．1999．Intentional language input: Through oral interpretation and mode conversion.『南山大学紀要』第 27 号，147－170.

近江誠．2003．『感動する英語！』文芸春秋社．

Rossetti, C., G. 1872. *Sing-song: A nursery rhyme book*. NY: Macmillan and Co.

斉藤兆治．2003．『英語の教え方学び方』．東京大学出版会．

斎藤栄二．2008．京都教育大学附属京都小・中学校研究発表大会英語科分科会における分科会記録より．

斉藤孝．2004．『体を揺さぶる英語入門』．角川書店．

Waber, B. 2002.　*Courage*.　MA: Houghton Mifflin.

山本玲子．2008a．中学生の「自己発信力を高める」ライティング指導における実践的研究．『京都教育大学実践研究紀要』第 8 巻，89－98.

山本玲子．2008b．リズムと身体感覚を生かした「模擬対話」指導：実際の会話力につながる体験蓄積のための試み．『日本児童英語教育学会紀要』第 27 号，81－96.

Appendix

What is Pink?

What is pink?　A rose is pink
By the fountains brink.
What is red?　A puppy's red
In the barley bed.
What is blue?　The sky is blue
Where the clouds float through.
What is white?　A swan is white
Sailing in the light.

What is yellow?　Pear are yellow,
Rich and ripe and mellow.
What is green?　The grass is green,
With small flowers between.
What is violet?　Clouds are violet
In the summer twilight.
What is orange?　Why, an orange,
Just an orange!

What are Heavy?

What are heavy?　Sea-sand and sorrow;
What are brief?　Today and tomorrow.
What are frail?　Spring blossoms and youth;
What are deep?　The ocean and truth.